



CIF JAPAN

NEWSLETTER No.34

<http://cif-japan.papnet.jp/>
cifjapan08@gmail.com

Council of International Fellowship Japan

発行人 NPO 法人 CIF ジャパン 事務局長 坂本正路
編集人 同 坂岡隆司 発行日 2016 年 3 月 27 日
事務局 〒607-8216

京都市山科区勸修寺東出町 75 からしだね館

TEL 075-574-2800 Fax 075-574-0025

第 1 回 国際交換研修プログラム

実施完了のご報告

理事長 竹内 和利

わが CIF ジャパンがかねてより実現を希望していた、日本に外国の研修者を招致するプログラムは、念願が叶いようやく昨年 10 月実施することができました。始めにこの企画実現のため、多額のご助成を頂いた共催者でもある公益財団法人愛恵福祉支援財団に感謝を申し上げ、併せて惜しみなくご協力とご支援をくださった同志社大学社会学部木原研究室、京都の 4 つの社会福祉法人の皆様、研修者を 2 週間お泊め頂いたホスト・ファミリーの皆様、ボランティアそれに会員有志の皆様に、厚く御礼を申し上げます。

国際研修プログラム(以下 IPEP)は 1960 年に欧州の諸国を中心に CIF 結成以来、20 数か国の支部によって継続的に進められてきました。遅ればせながら CIF ジャパンも 2014 年の CIF 代表者会議で承認を得て、アジアではインド、ネパールについてようやく実施に到ることができました。ここにご支援いただいた各位に感謝を込めて事業の概要をご報告させていただきます。

まずこの事業の〔目的〕を当初次のように掲げました、「海外の専門従事者に対して、わが国の対人社会サービス実践の実情を紹介し、現場における相互研鑽を通じて情報と人の交流を深め、延いては国際社会におけるわが国対人社会サービス事業の寄与の方途を探る機縁とする。」次に事業の内容と実施経過をご説明します。

国際研修参加応募者 6 名から 3 名を選考

★平成 27 年 4 月 1 日～6 月 30 日の 3 か月間、CIF 加盟各国支部宛に募集案内をメールで伝えた結果、6 名の応募がありました。国別には、フィンランド、オランダ、スウェーデン、台湾、ドイツ、スペインで、書類審査の末、つぎの 3 名を選考しました、



- ・ツイヤ・ヌメッラさん (フィンランド)
サイマー応用科学大学主任講師
- ・ヘレーネ・ヴォラードさん (オランダ)
保護支援施設ソーシャルワーク主任
- ・ジョージ・デスターさん (スウェーデン)
精神科クリニック・ソーシャルワーカー

【写真】: 京都到着第 1 日目の歓迎夕食会の席で、左からヴォラード、ヌメッラ、デスターの各氏

★プログラム実施期間中の研修者の動向

- ・10 月 2 日午前 研修者 3 名は同じ便で全員関西空港到着。浅野寿一会員夫人の歓迎・出迎えを受け、空港タクシーで京都に移動、ホテル到着後竹内理事長と昼食、ホテルで休息。当夜はホテル・オークラ新町にて会員有志による歓迎夕食会に出席
- ・10 月 3 日午前 プログラム・オリエンテーション実施 (事務局)
同日 午後 ホスト・ファミリーの迎えを受けてそれぞれ家庭に移動。
- ・10 月 5 日午前 京都伝統工芸センター「みやこめっせ」見学。午後、同志社大学社会学部にて、日本の社会福祉および同志社大学に関するオリエンテーション、学部ゼミ見学、特別講義参加
- ・10 月 6 日午前、京都市市民防災センター見学
午後、同志社大学社会学部木原教授大学院ゼミにて、研修者の職場経験など個別紹介、大学院生の研究発表聴取と討議参加
- ・10 月 7 日午前、同志社大学社会学部にて高齢者福祉特別講義、精神保健福祉援助実習授業参加、

木原研究室昼食会に参加。午後、社会福祉法人ミッションからしだね訪問、説明を受ける。

- 10月8日午前、社会福祉法人京都国際社会福祉センターによる公設民営・京都市横太路福祉工場(授産施設・資源ゴミなどの再資源化中間処理工場)見学。午後、社会福祉法人市原寮・特養・デイサービス「花友じゅらく」、社会福祉法人健光園・特養・デイサービスセンター「健光園あらしやま」見学
- 10月9日終日、個別研修開始(研修者が個別に選んだ施設現場での研修に参加)
- 10月10日終日、京都市内観光(清水寺、金閣寺他)
- 10月11日終日、奈良市内観光(興福寺、春日神社、奈良公園他)
- 10月13～16日 個別研修継続(上記社会福祉法人施設を中心に随時訪問・見学先を選択)
- 10月16日午後 プログラム評価と反省会。夕方「インターナショナル・デイ」(送別会)開催 於カフェ・トライアングル、修了証授与、会員、ボランティアとの会食と歓談の相互交流。



【写真】：インターナショナル・デイにお集まりの皆様

- 10月18日 研修者1名関空より帰国、2名は国内旅行に出発

★振り返ってどのような成果が得られたか

当初より望まれる事業成果として5つの目標を掲げました。その目標に沿う「事業の成果」は、プログラム評価・反省会および研修者に対して行ったアンケート調査の結果、及び直後に受け入れ団体の皆さんから頂いた感想に基づいています。

1. (目 標) [外国人専門従事者を受け入れるわが国の対人社会サービス事業現場が、魅力的かつ生産的な事業内容を提示し、来訪者がそれに対する関心と評価を高め、その習得に意欲を示すこと。]

研修者を受け入れられた大学、社会福祉法人各施設が相応に充実した情報提供およびサービス実践を研修者に提示された結果、研修者から一様に高い評価と関心を呼び、将来にわたって人と情報の交流が希望された。

2. (目 標) [事業現場での気づきや疑問などを含めた意見交換が、外国人専門家と事業の現場担当者のあいだで積極的に行われる結果、有効な差異の認識と相互理解の進展。]

大学および施設において随時、研修者と現場職員との意見交換が行われた。有効な差異の認識には事後のそれぞれの立場での振り返りが必要であり、こんごに具体的な成果を待たねばならない。相互理解の進展は予想以上に見られたが、施設現場での研修にはさらに数日のゆとりが研修者から希望された。

3. (目 標) 外国人専門従事者による日本人及び日本社会・文化への関心の増大

日本の文化・社会に対する関心は、応募の動機からも少なからず伺えたが、現場研修の傍ら、研修者はいずれも興味と関心をもって日本人と日本文化に臨んだ。とくにホームステイにより、参加者からは、日本の家庭生活、習慣などを見聞できたことを貴重な経験であったと一様に評価を受けた。

4. (目 標) 日本の対人社会サービス従事者の国際的視野拡大と外国事情探求への意欲増大

日本の従事者への事業の効果はこんごに期待されるが、研修者を受け入れた事業現場の従事者の中には、交流を通して国外の事情について興味関心を持った者も少なくなかった。

5. (目 標) わが国対人社会サービス事業者による近隣諸国の専門家との相互交流と相互支援関係の樹立

研修者個人または所属団体と日本側団体との相互交流の種はまかれたので、相互交流の実をこんごに待ちたい。

★参加者・関係者から出た将来の為の反省点

- 1) 研修者から、職場で余裕をもって休暇の申請ができるよう、参加通知を受けてから研修開始までの期間をなるべく長期にするほうが望ましいという感想がだされた。
- 2) 2日間の施設見学のうちで、1日3施設を見学訪問した日は忙しかつたので、もうすこし余裕をもてるように、という希望があった。
- 3) 主催者の感想として、ホスト・ファミリーの家庭事情について、短期宿泊者である研修者には、日本の生活習慣の説明など相応の対応のできる家庭が望ましいと感じた。

- 4) 研修施設先の希望について、今回三つの法人施設に限定していたが、将来は研修者の希望と受け入れ施設の内容のマッチングを選考の際によく吟味することが大切である。選考後に研修者からの種々指定外の施設研修の希望が多くならないために。
- 5) 4) との関連で、将来は当初より受け入れ施設を限定せず、対人サービス・オールラウンドで、応募者の希望する受け入れ機関を手配する途があり、今後の検討の余地を残す。
- 6) 研修期間の2週間は研修生に忙しい印象を与えたのではないかと、特に個別研修の期間へのゆとりや、観光スケジュールの自由化なども検討してみる必要が感じられた。

★事業の収支決算内容

【収入の部】		【支出の部】	
1. 助成金	380,000 円	1. 人件費「諸謝金」	270,000 円
2. 寄付金	95,000	2. 会議費	139,470
3. 参加者負担金	118,665	3. 資料費	1,964
4. 法人負担金	5,000	4. 印刷・複写費	16,200
収入合計	598,665 円	5. 交通・通信費	123,397
		6. 雑費	36,482
		支出合計	587,513 円

★ご協力頂いた団体及び個人（順不同、敬称略）

- ・公益財団法人愛恵福祉支援財団（共催団体）、
- ・同志社大学社会学部木原活信教授研究室
- ・社会福祉法人市原寮（特養ホーム花友いちはら、特養ホーム花友じゅらく）
- ・社会福祉法人健光園（特養ホーム健光園あらしやま、特養ホーム健光園ももやま）
- ・社会福祉法人国際社会福祉センター（京都市横大路学園、京都市横大路福祉工場）
- ・社会福祉法人ミッションからしだね（精神障害者就労継続支援・地域生活支援センター）
- ・北島イツ子、那須勝子（ホスト・ファミリー）
- ・山野尚美（京都府立大学公共政策学部准教授）
- ・加納劭、横田美紀子、佐野美月（ボランティア・通訳・ガイド）

★助成金・寄付金協力者（順不同、敬称略）

- ・公益財団法人愛恵福祉支援財団（助成金）、
- ・梶田叡一、高野百合子（以上一般寄付者）
- ・上利久芳、浅野寿一、浅野純江、上野美紀、江口敏一、奥野英子、梶村慎吾、加納光子、甘蔗寂泉、坂岡隆司、坂本正路、佐野富子、冷水豊、竹内和利、所久雄、延原正海、牧田稔、山本誠、岸川洋治、三宅浩（以上 CIF ジャパン会員）

「健光園あらしやま」で

学んだこと感じたこと

ツイヤ・ヌツメラ（フィンランド）

サイマア応用科学大学主任講師

地域社会で理解され援けられる日本の高齢者

今回、京都での高齢者サービス施設を親しく訪問した。なかでも社会福祉施設「健光園あらしやま」では高齢者に居住とデイサービスが提供されていた。施設は2012年に開設され、内部に10ケアユニットと2か所のショートステイ・ユニットが配置され、入居者数は120人であった。この法人は他にも市内各所で12の施設を運営している。

自分の生活スタイルを保つホーム居住者

「健光園あらしやま」では入居者が生活スタイルを維持し、自分のスケジュールで生活することを目指している。そのため個室には入居者の私物を置いている。又食事は外部にある調理室から運ばれるが、ご飯は毎日各ユニットで炊かれ、料理の香りが漂う。そして入居者はそれぞれ自分のお茶碗でご飯を楽しんでいる。

ここではまた家庭的な雰囲気大切に、入居者が生活機能を保持するよう支援に努めている。日本人は入浴を楽しむが、各ユニットには大きな浴槽のある温かい風呂があり、入居者は好きな時間に利用出来る。このように入居者の日々の生活を助ける多くの行き届いた技術が用いられている。



【写真】：デイサービスでゲーム参加のひとつ

入居者と地元の人の集うリビングルーム

・・・デイサービスセンターで感じたこと

デイサービスセンターは入居者だけでなくその地域の住民も利用できるが、それによって入居している高齢者は自分も地域の一員であると感じることができる。「地域交流スペース」には人たちが集まり出合いがある。そこには美容院、喫茶コーナー、和室、ゲームの部屋とともにカラオケの部

屋までである。このようにして高齢者に生活の質を確保し、地域の人とのふれあいを大切な生活の要素としている。ときにフィンランドの高齢者サービスは地域社会から切り離されているところがあるが、一方日本では高齢者のデイセンターは地域での多目的活動に欠くことのできない役割を果たしている。デイセンターは実によく活動していて、例えば午前中は赤ん坊を連れた母親たちが多くのアクティビティの内から、マッサージや就学前の児童やヨガのグループで過ごしている。そこには多くのイベントが行われ又そこには様々な世代の出会いがあり、じつに広い範囲の活動があり、これらを職員にボランティアが協力して取りまとめている。例えば華道、料理、音楽、ゲームなど様々なグループ活動があり、なかでも書道クラブはたいへん人気が高い。

高齢者にはリハビリも非常に重要である。この施設では個人やグループのための生活機能向上のために、多くの個々のトレーニングがあり又そのための用具が備えられている。さらに身体機能や大脳機能の向上に必要なさまざまなトレーニングの用具も充実している。もちろん入居者の家族や親族それに地域社会から支援を受けることも大切である。

印象的なボランティアの活躍

私が見て感じたことは、日本では子どものころから学校でボランティアを経験して成長している。それゆえ日本では高齢者のサービス現場でもボランティアが重要な役割を果たしている。これに対しフィンランドではボランティアの伝統が浅く、ボランティアといえば高齢者になりがちである。それゆえ日本の高齢者に対するサービスの現状から学ぶところはたいへん多い。又高齢者に対する尊敬の念は日本のあらゆるひとびとの間に見受けられる。サービスは地域社会の基準により組織され、高齢者はその地域社会のメンバーなのである。高齢者と地域の住民が世代を超えていっしょに集うときボランティア活動は地域の豊かな財産であると感じた。（原文は英語）



【写真】仕事を終えた健光園の職員方を前にフィンランドの高齢者福祉の話をするヌツメラさん

A Rewarding Trip to the Beautiful Japan

Georg Dester (Sweden)
Psychiatric Social Worker

Coming to Kyoto and participating in the IPEP I had high expectations. Before my arrival, CIF Japan had already sent a schedule and all activities seemed very well planned. As soon as me and my traveling companions arrived to Kyoto we received a warm welcome and I understood that we were in good hands and would experience many great things the over the next two weeks!

Staying with a Japanese family was something that I had especially looked forward to. I have always been curious about the daily life of Japanese people: what do they like to eat, what does a typical home look like, etc. Of course I had tried Japanese food before at Japanese restaurants but I didn't know anything about what a Japanese person would cook or eat just on a normal day in their own homes. It was a joy to try my host family's food every day since it was both tasty and mostly new experiences! The freshness of the food and the refined way of seasoning was something that I really appreciated. It was interesting for me to hear that some dishes are served warm during the winter season but served cold during the summer.

I learned many interesting things about the Japanese welfare system and what kind of help people with mental illness can get. It was very nice to spend time at Mission Karashidane and to take part in cooking with the staff of Café Triangle but also deliver 'Bento' to elderly people. One member at Karashidane told me that he always attached a hand written letter to the receiver of the bento, with just a few lines about his day or some kind words. This lovely act made a great impression on me and I really think it reflects

the caring and thoughtful nature of the Japanese people. I'm sure I will always remember all the nice people I met and the wonderful time I had in Japan!

...

初めての国際交流研修を終えて

社会福祉法人ミッションからしだね
理事長 坂岡 隆司
(CIF ジャパン副理事長)

記念すべき第1回の国際交流研修を無事終えて、ホッとしています。会員の皆様のご協力に心から感謝いたします。今回、何と言っても助成金をいただけるかどうか、というのが一番のポイントでした。無ければ開催不能でしたので。その意味で、愛恵福祉支援財団様の助成は大きかったです。坂本理事にはこのために格別ご尽力いただきました。地理的な制約もあり、どうしても京都や大阪の会員が中心となりましたが、関係者やボランティアの方々のご協力もいただいて、CIF ジャパン初のIPEPとしてはまずまずの成功だったと思います。今回、私の仕事場でもあるからしだね館も、研修現場の一つとして、精神科ソーシャルワーカーGEORG氏（スウェーデン）を受け入れました。対人援助という分野に身を置く者どうしの交流は、国や言葉の枠を超えて大いに刺激になりました。利用者も職員も研修生の受け入れを大いに楽しませていただきました。このプログラムが2回3回と続くことを願っています。次回はぜひ他地域で。

国際交流は大学を開く好機会

同志社大学社会学部
木原 活信 教授

CIF ジャパンからの依頼を受け、北欧諸国から研修生3名を受け入れて同志社大学で研修していただいたことは、同志社にとっても国際交流の場となり、すばらしい機会になったと思っています。社会福祉教育においても、国際的な機関、地域の施設とこのような場を通して、つながりを持つことは大学が机上の空論や思弁から脱することになり、その社会的使命を果たすという観点からも意義深いことかと思えます。

学生たちにとっても、北欧諸国の方々の来訪には大変刺激があったようです。学生たちのなかに

は、もっと英語がうまくなれば深い交流ができたのになどと、発奮材料になった学生もいたようですが、これもまた教育効果の一つであろうと思います。大学は開かれた場所であるべきだと考えている者として、今後もこのような国際交流を活発に、とりわけ地域の福祉施設・機関と連携していくことができれば幸いです。同志社にこのような貴重な国際交流の機会を与えてくださいましたことに心から感謝いたします。



【写真】大学院生ゼミに参加する研修生

施設にフィンランドの研修者を迎えて 短くも有意義な国際交流研修

社会福祉法人 健光園
理事長 小國 英夫

健光園では主にフィンランドの Saimaa 応用科学大学でソーシャルワークの主任講師をしている Tuija Nummela さんに研修の場と機会を提供しました。彼女は日本の高齢者福祉が今どうなっているか、これからどうなるのかに関心を持っていました。

フィンランドの20倍以上の人口で戦後世界一の速度で高齢化が進んだ日本と、人口規模が550万人と少なく時間を掛けて高齢化が進んだフィンランドとの間には当然いろいろ異なる点もありますが、思いのほか共通点もあることを学びました。

健光園での夜の勉強会では参加した職員に自分の母親の状況を紹介することを通して高齢者ケアの現実を教えてくださいました。また、高齢者住宅の現状や Memory therapy（記憶療法）についても詳しく紹介してくれました。

研修期間は長いようで短くあっという間に終わりました。しかし内容は充実していたと思います。今後もこうした交流研修が盛んになることを期待しています。

ホスト・ファミリーはわが家の楽しみ

ボランティア 那須 勝子

京都で研修を受けられるフィンランドのツイヤさんとオランダのヘレナさんのホストをお引き受けしました。私たち家族は40年にわたり世界各国から、学生、研究者、医師、学者らとご家族を、年齢も15～75歳にわたる方々をお世話してきました。お世話もさりながら、世界中の色々な人と話し合うのが大好きなことが、お受入してきた一番大きな理由です。今回のお二人はソーシャルワーカーの女性ですが、私が「高齢社会を良くする女性の会」の会員ですので話題も多く、夕食後の話し合いはとても楽しいものでした。ひととき女性の会の会員10名余りがミニ講演会を開いて交流を深めました。又私が懇意にしている古着屋さんにお連れし、わが家で着物ファッションショーを開いて盛り上がったことも楽しいひと時でした。

日本文化への興味に感心

ボランティア 北島イツ子

わが家ではこれまで何人もの留学生を受け入れてきましたが、職業をもつ外国の方をお受けするのは初めてでしたので、当初は戸惑っていました。スウェーデン人のゲオルグさんはたいへんハンサムな長身の好青年で、とてもよい印象を持ちました。とにかく互いに英語のやり取りができてよかったです。彼は以前から大の日本好きで、ご自分の家で盆栽や漬物を楽しんでいると聞きましたが、わが家のものにも大変興味を示されました。彼は偶然、大相撲京都場所見物の機会に恵まれ、その後は禅寺へ座禅にと旅立たれました。

「NPO」や「CIF」というのは、今回わたしが初めて耳にしたことばでしたが、関係の皆さんにも出会え、パーティにも参加できて新しい世界に触れさせていただき有り難く思っています。

CIF 世界大会・BD 会議に出席して

CIF ジャパン 青木 雅子
(CIF スコットランド・2013)

昨年(2015年)のCIF世界大会は8月3～7日の間スウェーデンのシグツナ(Sigtuna)で開催されました。それに先立ってCIF各国支部代表者会

議が3日に亘って開かれましたが、今回CIFジャパンを代表して参加させて頂きました。タイミングよく今回は「初のPEP日本開催」への各国の期待も大きく感じられ大変好印象でした。世界大会最終日の総会では参加者に更にPEPの案内が行われワールドニュースに掲載された赤い鳥居がスクリーンに全面的に投影されて本当に美しく印象的でした。またうれしいことにスウェーデンから日本のプログラムに参加が決まっていたデスターさんがはるばる会場にご挨拶に来てくださりお目に掛かれて有り難く思いました。



【写真】は世界大会参加者：CIF HP より転載

以下、手短かに印象的に受け止めたことをお伝えいたしますと、

- (1) BD会議で印象的だったことは、ぎっしり詰まった日程の中で、多くの議題が処理され、それぞれ文書で正確に出席者への説明が、自然にそして速やかになされていたことや、小さな意見であってもみんなで傾聴する真摯な姿勢が各国代表に見受けられたことでした。
- (2) 今回の世界大会のテーマ「人権」に関して、人権を擁護することへの考え方が一般に私たちが思うのとは比較できないほど深く且つ広いという印象を受けました。
- (3) 大会期間中には、主催支部CIFスウェーデンの会員による素晴らしい民謡歌唱を楽しませて頂きましたが、さらに米国の声楽家で一流のオペラ歌手でもあるバーバラ・ヘンドリクスさんを招聘して参会者に音楽と歌唱の深さと素晴らしさを満喫させて頂きました。バーバラ・ヘンドリクスさんは人権問題に関する社会奉仕にも著名であると知り、大会のテーマ「人権」とともに世界各国の参会者への細やかな配慮がうかがえました。

初めてのことばかりで苦勞を伴う場面もございましたがCIFジャパン及びCIFの皆さまの温かいご援助により良き経験をさせていただき心から感謝申し上げます。

<<2015年度 CIF ジャパン講演会>>

『オランダで見聞した アウトリーチワーク』

～CIF 国際交流研修報告～

講師 愛知県立大学 教育社会福祉学部

田川 佳代子 教授



秋季恒例の CIF ジャパン主催の 2015 年度講演会は、都合により年を跨いで去る 3 月 5 日「からしだね館」にて開催され、参加者は 20 人を越え例年を上回りました。今回の講演は昨年 10 月、CIF オランダ開催の国際交換研修プログラムに参加された田川佳代子氏による研修報告を兼ねるものです。次に後日講演の要旨を講師にご寄稿お願いし、後日お送りいただきましたので、本紙上に全文を掲載させていただきます。講師に改めてお礼を申し上げます。

【講演内容】

私は、2015 年 10 月 31 日から 11 月 14 日の 2 週間、CIF オランダ国際専門職交換研修に参加しました。前半はアムステルダム応用科学大学との提携によるアウトリーチワークのプログラムに、リトアニア、トルコ、キルギスタンの参加者と一緒に取り組みました。後半は、各々の関心に分かれ、私はグレースバーグ在住のホスト・ファミリーのコーディネートにより、隣接するナイメーヘン地域で行われる社会支援、長期療養介護、医療、予防、保健、リハビリテーション、住まい等について、各施設や機関で働く人々、市民や専門職の方々を訪問し、担当者の話を伺いました。この体験は、改めて日本で進められている様々な施策を捉え返すためのクリティカルな視点を示唆し、オランダのソーシャルワークの領域で創出されるイノベーションを直に触れて学ぶ貴重な経験となりました。

アウトリーチワークは、自ら助けてと声に出して救いを求めることのできない人々、安全でない劣悪な環境で、孤立し不安定な状況に置かれている人々、そうした状況を自ら変える術や方法をも

たない人々、そのなかで自らを恥じ、他者への不信を募らせ、怒りを抱き、破滅的な絶望に陥っている、そうした人々にアプローチする手法といえます。そうした人々を発見し、かけつけ、話に耳を傾け、再び社会に参加し役割をもって生きていけるよう希望をつなぎ、彼らのパーソナル・サポート・ネットワークを修復・再形成し、再び自立して生きていけるよう、彼ら自身の健全さを強化し、社会参加の道筋を一緒に探していく支援でもあります。自由と多様性への寛容さの反面、オランダ社会に影を落とすイスラムの問題に向き合い、社会的結束の崩壊を防ぎ、社会的統合の実現をめざし支援を行う方法としてアウトリーチワークは位置づけられます。

日本では地域包括ケアシステムの推進として、自助、互助、公助、共助の理念のもと、医療・介護・予防・住まい・生活支援が切れ目なく住民に身近な地域で提供される仕組みづくりが進められています。しかし、縦割り行政の弊害や組織間関係の利害調整、多職種連携・協働、行政と民間の責務、市民と専門職の役割等、そのあり方をめぐっては克服すべき障壁が山積みです。

アウトリーチワークは、すべての市民が一人一人自立的に生きること、社会に参加し、社会を構成する市民としてその責任を果たすことが基本的考えにあります。「どう市民はクライアント、顧客、消費者という”繭に包まれた温かい保護被膜”から抜けでるのか」¹というワーカーからの問題提起がそれを象徴しています。

すべての市民が参加する社会へと転換するため、構造化され、秩序づけられ、統制された制度的世界から、不確かな要素の多い人々の暮らしの生活世界に立ち、むしろ不測のダイナミックな相互作用が起こるプラットフォームでの一時的解決や作業原理により、その責任を家族や親族に返していく。問題をもつその人は、問題解決の部分を構成する人でもあるとの考えに立ち、危機やストレスを活用しながら、トップダウンではなくボトムアップの、当事者のイニシアティブに委ね、裁量を要求します。

私たちは、アウトリーチワークの考え方を実践しているプロジェクト、JES(your own place)「あなた自身の場所」を訪問しました。ホームレスの、アルコールや薬物依存症の人に一般住宅を提供し、生活を自己管理することを任せ、1、2 年かけて自立を目標とした支援が行われます。費用はアムステルダム市が負担し、大学院生や元利用者がスタッフとして働く。家賃滞納で立ち退きになる人々へのアウトリーチワークを展開する支援団体やア

ムステルダム応用科学大学と提携・協働し、JES内だけでなく、このセルフ・マネジメント・ケアのプロジェクトを他でも一般化していけるかどうかについて、教育・研究・実践の連携・協働が動いています。

オランダは、知識経済社会として知られています。イノベーションと言えば、日本ではものづくりですが、オランダでは、日常生活習慣や思考のレベルで進められています。アウトリーチワークもその一つであり、他機関の異なる専門職がいかに関わり、連携できるか、体制や制度の境界を乗り越え、古い因習的なものとは異なる新たな考えやシステムを取り入れ、社会の変化をもたらす新たな価値を創り出すため、様々なレベルのシステムが自律的、主体的に働き、互いに交わり、刺激しあう動きが大変印象に残りました。

注¹ Rosalie Metze, “Transition of social work professions towards enabling citizenship”
November 4th 2015 CIFプログラムでの報告



【写真】他国の研修者と自転車で外出の筆者（左端）

謝辞： CIF The Netherlands 理事長 Ms. Mieke Weeda, プログラム・コーディネーターMs. Jenny Pourier, University of Applied Sciences, School of Social Work and Law in Amsterdam のコーディネーターMs. Simona Gaarhuis, ホスト・ファミリーでありプログラム・コーディネーターの Mr. Max de Coole and Ms. Anke de Coole-Feenstra, 訪問を受諾くださった多くの方々に感謝を申し上げます。そして、CIF ジャパン理事長竹内和利様、事務局の坂岡隆司様、並びに CIF 理事・会員の皆様方に感謝を申し上げます。

＜2016 年度 CIF ジャパン総会のお知らせ＞

日時 2016 年5月 28 日(土)

13:30～16:00

場所 かながわ県民センター7階(712号)

横浜市神奈川区鶴屋町 2-24-2

☎045-312-1121

アクセス 横浜駅西口より5分

案内 後日、総会議題、議案などご案内をお送りいたします。会員の皆様は是非ご出席ください。

楽しかった日米交流の一日

CIF ジャパン副理事長
坂本 正路



【写真】日米友好祭に集まった方々

去る9月20日(日)CIF アメリカのメンバーであるラケル・カジードーさん(基地内のファミリーサービスのケースワーカー)の招待でアメリカ空軍横田基地の「日米友好祭」に出かけました。参加者は梶村慎吾夫妻、浅野純江さんと子供さんにお孫さん、坂本の計9名でした。

基地の滑走路は食べ物や種々の出店があり、そこに数万を超える人々が溢れかえり、大盛況でした。各種の飛行機の展示のみならず、模範飛行や落下傘降下のアトラクションもあり、楽しい一日を過ごすことが出来ました。

＜＜ 2016年度会費納入ご協力のお願い ＞＞

新年度の会費の納入をお願いいたします。また、昨年度の会費が未納の会員各位には併せて納入をお願いいたします。(年会費 3000 円)

郵便振替口座 番号 00270-4-54121

加入者名 CIF ジャパン

銀行口座 三井住友銀行 八王子支店

(店番号 843) (普)7815136

口座名義 CIF ジャパン出納責任者梶村慎吾

《編集後記》

初めての国際交換研修(IPEP)を無事京都で終えることができ、ホッとしています。皆様のご協力を心より感謝いたします。

今号は、IPEP の報告特集となりました。また、オランダ研修参加報告講演の記録も中身の濃いものとなっています。皆様感想をお寄せいただけましたら幸いです。

ニュースレターに投稿をお願いします。研修参加の思い出、近況、本会に対する意見提言など、何でも結構です。(坂岡)